

# 屋敷林に調和した吾妻建

## 【入道家】

入道家は、藩政期に組合頭を務めた農家で、明治期には初代村長として地域農業に貢献した旧家である。

建物は嘉永6年(1853)に建てられたもので、当初は茅葺きであったが、明治から昭和初年までの幾度の改造を経て、現在のような切妻屋根・妻入りのアヅマダチ(吾妻建)となった。

屋敷は東を正面にして、周りを屋敷林で囲み、主屋を中心に左手前と右手後に土蔵を配している。主屋は間口20.5m、奥行19.0mで、切妻・桟瓦葺きの屋根、四方に下屋を付けた大きな民家である。

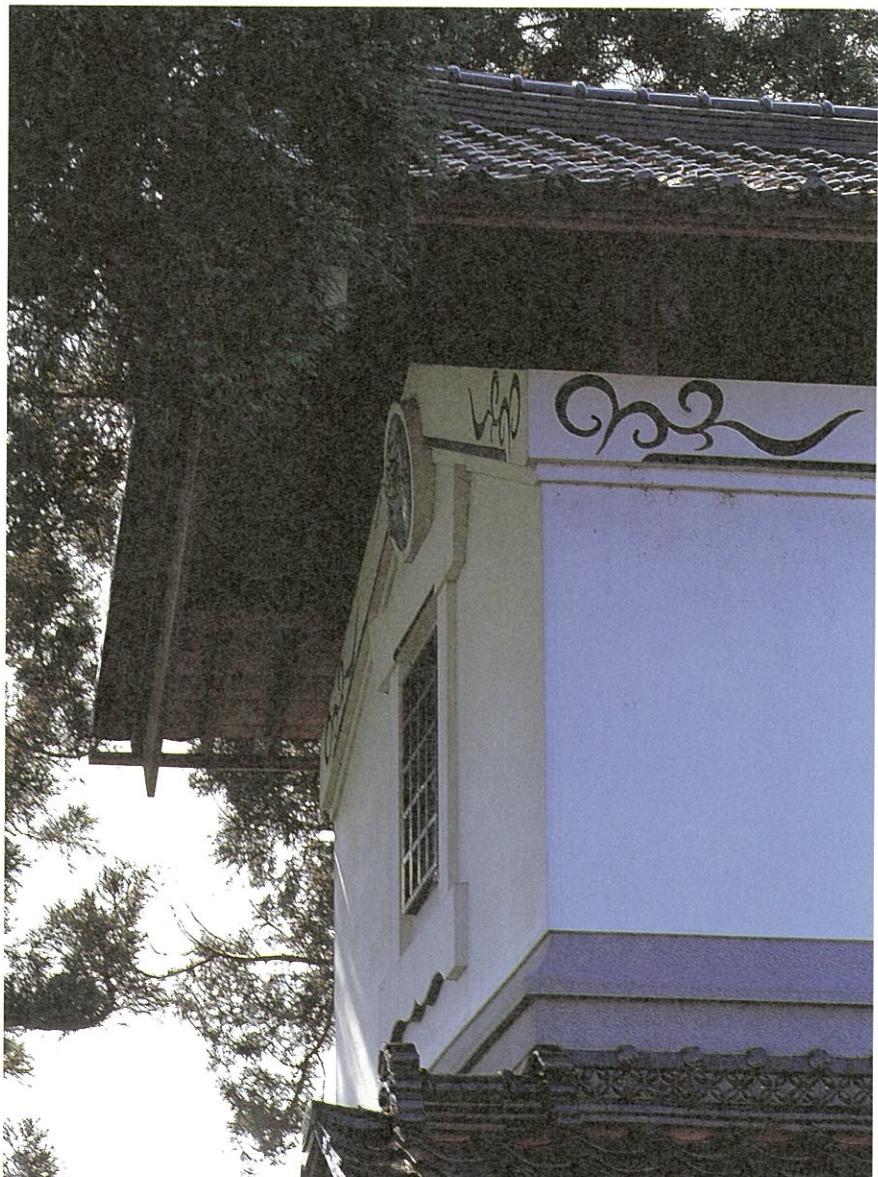
主屋の外観は切妻屋根が特徴的で、妻側の木組みと漆喰壁の対比が背後の屋敷林に映えて美しい。

平面は基本的に4列3段、右側に玄関、土間、台所があり、左側には式台(賓客玄関)にあたる上玄関を設けている。また、15畳の広間を中心、右側は庭に面して座敷などのハレ空間、奥には内向きの茶の間や和室が配されている。

広間と茶の間は、太い柱が幅広い指鶴居や貫で結ばれ、上部の梁が十字に組まれた「棒の内」造りで、壁は土壁だが広間だけは珍しい板壁になっている。

座敷は、庭の境に切目縁を付けた土庇を設け、室内は天井も含めて拭漆塗り。

土蔵・主屋・屋敷林、まさに砺波平野の散居村に多く見られるアヅマダチ建築の代表作といえる民家である。



切妻の妻面を正面に見せたアヅマダチと呼ばれる形式が特徴的で美しく、半間ごとに立てた束に梁を3重に掛け、束には貫を密に通して妻面全体を枠目状にしている。黒釉の瓦屋根が重厚で力強い。







# 土蔵扉で守られた町家

## 【佐野家】

佐野家住宅は、かつて高岡米穀取引所の仲買人組合長などを務めた高岡財界の有力者菅池貞次郎が建てたものである。屋敷は、主屋を道路に接して東面し、間に中庭を挟んで、奥に土蔵を4棟横一列に配置している。また、中庭の南側には独立した茶室、相対する北側には台所と風呂棟を配している。

建物は明治33年(1900)の高岡大火の直後に建てられたもので、防火建築を主眼において設計されているが、同地区にある菅野家などより外観・内部とも洋風の意匠が多用されている。

外観で特徴的のは、他の土蔵に用いられている土製の観音開き扉ではなく、銅板張りの両開き防火戸が入れられていることである。2階は上げ下げの木製窓で、銅板張りとの対比が意匠的である。

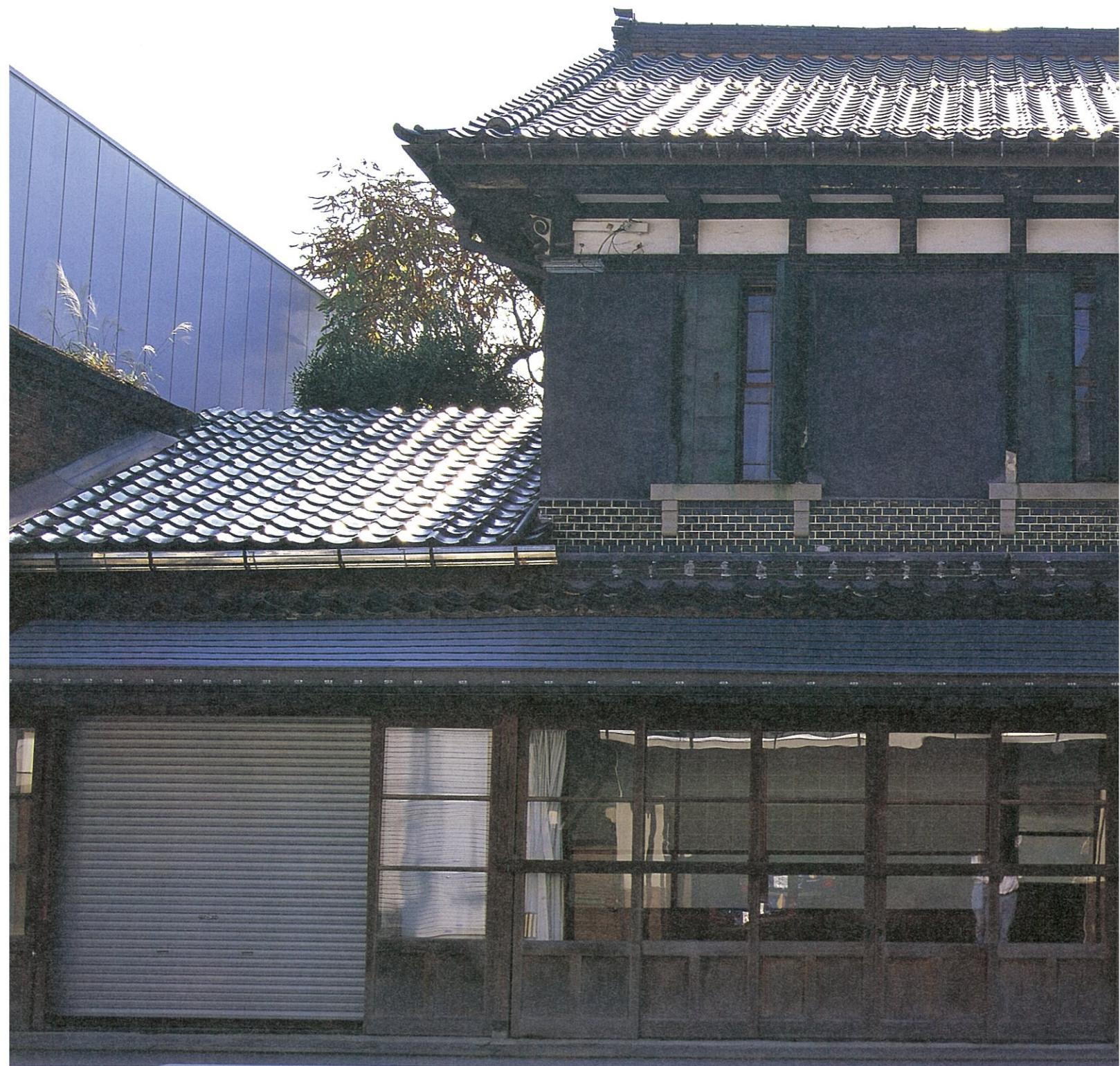
主屋は間口13.5m、奥行9.5mの総2階建ての土蔵造りで、屋根は左側を入母屋造り、右側を切妻造りとした桟瓦葺きである。正面と背面には1間の庇を付け、正面左側に間口5.5m、奥行4.5mの平屋部屋を設け、主屋と一緒に庇を付ける。

かつて、ミセの道路側には格子が取り付けられていたが、現在はガラス戸に改装されている。また、ミセ2階には洋間があり、漆喰彫刻を施した天井などの洋風意匠が見られるが、座敷まわりの空間は銘木を多用した数寄屋である。



軒は洋風意匠で、白と黒の漆喰を用いた特異な表現である。窓上に額縁状の蛇腹をまわし、渦巻き型の持送りを出して出桁を受ける軽快な意匠である。連続する銅板張り防火戸が印象的である。







正面1階にはガラス戸が入るが、かつては狭間格子が連続し、内側には障子戸が入っていた。2階は腰が化粧煉瓦積で、壁面は黒漆喰と白漆喰を対比させ、銅板の防火戸との調和が美しい。